# 金木犀

ぼくたちの町には、フラワーロードと呼ばれる校門から続く通学路がある。フラワーロードは、十年前に当時の町内会の人たちが、寄付を募って季節ごとにいろいろな花が咲く花壇をつくったり、家に植えている樹木を持ち寄ったりして整備されたそうだ。ぼくは、フラワーロードにある花の中では、校門の前に咲いている小振りな金木犀が一番好きだ。

そのフラワーロードの花を育てるボランティアの方々の中に、何かにつけてぼくたちに注意をしてくるおじいさんがいる。だから、あのおじいさんに会うたびに、いやな気持ちになる。

夏休みが終わりに近づいたある日のこと、小雨が降る中、ぼくは、友だちと三人で釣りざおを持って、山のふもとにあるため池に向かっていた。ルアーの話をしながら、うきうきした気分でため池に続くゆるやかな坂道をのぼっていると、

「ちょっと待て。こんな天気なのに、ため池に行くのか。危ないからやめておけ。」

と、すぐ横の畑から声が聞こえた。みんなが、

（しまった。）

という顔をした。案の定、あのおじいさんが、

「こんな天気だと足下もすべりやすいし、もし、ため池に落ちたら大変なことになる。今日はやめておけ。」

と、注意してきた。

（何でぼくたちの話の中に入ってくるんだよ。放っておいてくれたらいいのに。）
その時、ぼくの心の声が聞こえたかのように、
「君たちのことを思って言っているんだ。それがわからないかなあ。」
あきれたように言われ、ぼくたちは何だか小馬鹿にされたような気がした。いつもは無視をして通り過ぎるぼくたちも、今日という今日は、もう我慢できなかった。
「うるさいんだよ。」
「関係ないだろう。親でもないくせに。」
「顔を見るたびにいらいらする。」
日頃のうっぷんが、ここぞとばかりに出てしまった。
それを聞いたおじいさんは、一瞬かっと目を見開き、
「だから、おじさんは、君たちの・・・。」
と、言いかけて、畑の中に戻って行った。
「やったな。いい気分だ。」
「年寄りは黙ってろよ。」
と、ぼくたちは大声で悪態をつきながら、ため池に向かった。
ぼくたちは、この日からおじいさんに会うたびに、
「うるさいじいさんがいるぞ。」
「本当に迷惑だよな。」
などと、聞こえるように悪口を言った。

秋晴れの中、ぼくたち三人が登校していると、あのおじいさんが、花壇の手入れをしていた。
「今日もやってるぜ。」
「好きでやっているんだから放っておこう。」
ぼくたちは、わざとおじいさんの耳に入るように言いながら、横を通り過ぎた。
しばらくして、校門の前まで来ると、ふといい香りが漂ってきた。
「金木犀が咲き始めたんだな。」
「おれ、この香りが好き。」
などと、口々に話した。ぼくは、
「いいことを思いついたぞ。この花がたっぷりついた枝を教室の花びんに挿そう。きっと教室もいい香りになるな。」
と、言った。
「グッドアイディア。おっ、この枝がいいな。」
「おい、その枝だと、花びんに入らないぞ。」
と、盛り上がりながら、ぼくたちは、力任せに金木犀の枝を何本か折った。

「こらっ、何をしている。」
突然、大声が背中に突き刺さった。振り返ると、いつも優しい表情の校長先生が、見たことのないような顔で立っていた。ぼくは思わずうつむくと、足下には金木犀の花びらが散乱していた。
「片岡さん、申し訳ありません。」
校長先生が謝っている方を見ると、あのおじいさんが立っていた。

「どうして・・・・。」

その後、校長先生は、ぼくたちを校長室に連れて行き、ソファーに座らせた。そして、
「君たちは、どうして金木犀の枝を折っていたんだい。」
と、質問した。ぼくは、
「金木犀、いい香りだったので、教室に持って行こうと思って・・・・。」
と、答えた。
「他の二人もそうなのか。」
友だちは、黙ってうなずいた。
「確かに金木犀はいい香りがするね。だけど、勝手に枝を折って持って行くのはどうだろう。片岡さんに悪いことをしたな。」
ぼくは、校長先生の言葉に、少しむっとした。
「校長先生、片岡さんってどんな人なんですか。」
「どんな人って、どうして。」
「だって、あのじいさんは、いつもぼくたちにガミガミ言ってくるんです。本当に迷惑な人なんです。」
ぼくの言葉を聞いて、友だちも、
「校長先生は、知らないんだ。おれたちがどれだけ嫌な思いをしていたか。それなのに・・・・。」
「ぼくたちは、ちょっと金木犀の枝を折っただけじゃないですか。」
興奮して話すぼくたちに、校長先生は、
「『ちょっと枝を折っただけ』か・・・・。」

と、低い声でつぶやいた。そして、諭すように話し始めた。
「あの金木犀は、片岡さんの奥さんがとても大切にしていたものだそうだよ。奥さんは、子どもが大好きでね、いつも声をかけたり、気になる子どもに注意したりしていたんだ。奥さんが亡くなった時に、片岡さんも、子どもたちが健やかに育つようにと思い、大切にしていた金木犀を寄付してくれたんだよ。そして、毎日のようにフラワーロードの手入れをしてくれているんだ。」
校長先生の話を聞き、ぼくは、はっとした。

何とも言えない沈黙が続いた後、思いつめたような表情をした友だちが、
「校長先生、今から片岡さんのところに行ってもいいですか。」
と、言った。ぼくたち二人も顔を見合わせてうなずいた。
「君たちがそうしたいのなら行きなさい。」
そう言うと、校長先生は、ぼくたちの後ろをゆっくりと歩いてついてきてくれた。おじいさんは、ちょうど花壇の手入れを終えて帰ろうとしているところだった。ぼくたちは、
「片岡さん、ごめんなさい。」
「本当に、すみません。」
と、口々に言った。
「いいや、謝るのはわたしの方だよ。君たちの様子を見ていると、勝手に心配になってな。しつこく言い過ぎたよ。」
「ぼくたちの方こそ・・・。それに、大切な金木犀も・・・。」
言いかけたぼくの言葉を遮って、おじいさんは続けた。

「いい香りがしたから、教室に持って行こうとしたんだろ。こいつも、枝を切ってくれてすっきりしたって喜んでいるよ。」
ぼくには、もう言葉が出てこなかった。そして、笑顔で、
「授業が始まるぞ。子どもは勉強が仕事だ。早く行きなさい。」
と、言った。校長先生もうなずき、ぼくたちに教室に行くよう目で合図をしてくれた。ぼくたちは、おじいさんに一礼して、教室に走って行った。

次の日の朝、ぼくたちはいつもより早く学校に向かった。フラワーロードに入ると、おじいさんはすでに一人で花壇の花に水をやっていた。ぼくたちは、急いでおじいさんに近づいた。
「片岡さん。ほうきをお借りしてもいいですか。」
「ああ、いいよ。」
ぼくは、おじいさんのほうきで道をはいた。友だちも、おじいさんにあわせてホースを伸ばしたり、わずかに生えている草をひいたりした。おじいさんがいつも丁寧に手入れをしてくれているので、ぼくたちにできることはほとんどなかったが、それでも構わなかった。

おじいさんが水やりを終えた時、金木犀にうっすらと虹がかかっていた。